

ユース主体の活動を通じて表面化した 普及における課題点

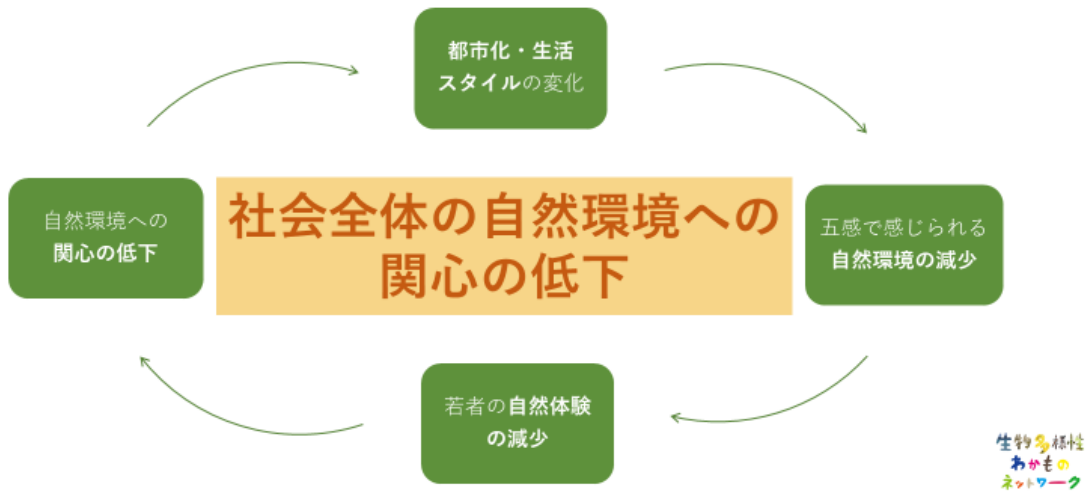
課題① 自然体験の減少

私たちの世代では、自然離れが進んでいます。例えば小中学校では校区内に自然が残っていても、危険だという理由で子どもたちに川遊びを禁止するところが多くなっています。結果的に自然の中で生き物に触れ合う機会はとても少なくなっており、近所にどのような生き物がいるのか知っているのは幼少期の記憶をもつ高齢者だけ、という地域も少なくありません。森や川が「危険なところだ」と思って避ける以上に、中高生になると何も関心を持っていないという人が増えているように感じています。かつての里山環境が大きく失われ、地域の過疎化と人口の都市への集中が進んだことで、人々が自然環境と触れ合う機会が減少しました。

自然と触れ合う昔ながらの記憶は徐々に人々の中で薄れていき、核家族化などによって世代間のつながりが希薄化したことで、自然との触れ合いの記憶を思い起こす機会も減少しています。その影響で、自然の感じ方や、生きものの見つけ方がわからず、身近にある自然環境に気づけなくなってきました。

現在、生物多様性の課題に取り組む方々の多くは、幼少期に身近な自然の中で遊んだ経験を持っていたり、自然体験活動に参加するなど、なんらかの形で「自然を好きになった」経験を持っているのではないのでしょうか。やはり、生物多様性の普及を進めるには、このような幼少期の自然体験の機会の確保を重要であると考えられます。これは、逆に若者の自然体験の機会が減少すると、若者の自然環境への関心が低下することも示しています。また、どうしても子どもは教育により親の価値観の影響を受けてしまうことから、親の無関心が子どもの関心の芽を摘んでしまうこともあります。このことから、若者の関心が低下すると、その若者が成長して親になった際、その子どもの生物多様性への関心も弱くなってしまう可能性が高いと考えられます。こうして若者の自然環境への関心の低下が社会全体の自然環境への関心の低下につながり、都市化などの自然環境と人々の生活環境の分断を招き、更なる関心の低下につながるという負の連鎖が起こっていると我々は考えています。

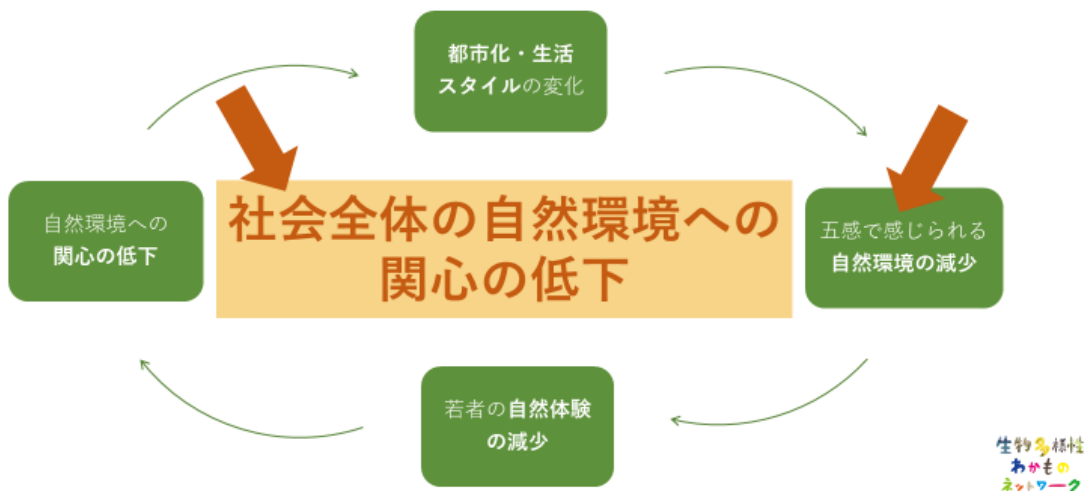
▼ 活動を通じて表面化した課題点 ▼



課題に対する対処法①

この負の連鎖を食い止めるために、私たちは「五感で感じられるような身近な自然、環境の減少」と「社会全体の自然環境への関心の低下」の2点に手を打つ必要があると考えています。

▼ 手を打つべきポイント ▼



五感で感じられる自然環境

「五感で感じられる身近な自然環境」に対するアプローチとして、(1) 現在までに減ってしまった自然環境を新たに創り、増やすことと、(2) 少ない自然の中でも自然を感じることでできる感性を養うことが必要であると考えています。

(1) の「自然環境を創る」というのは、具体的には、生物多様性に配慮した都市公園や学校内ビオトープの設置などがあげられます。ふとした時に立ち寄れるような身近な自然環境をイメージし、自然体験に主眼を置いて、鳥類や昆虫、クモ類など移動性の高い生物を目標にし、立ち寄った人々が安心して触れ合えるよう人獣共通感染症などにも配慮したビオトープを設置するべきだと考えます。

そして、環境を創ったとしても、(2) のように「自然を見る目」を養わなければ、自然の大切さやすばらしさに気づくことはできません。都会ではない場所で育った人は、地元のことを「なにもないところ」とよく言います。しかしながら、そのような地元の人々から認知されていない自然にもOECMsという概念で注目される価値ある自然があることは珍しくありません。そこで、この「感性を養う」ために、誰しも人生で最低3回は行くといわれている水族館や動物園、博物館の環境教育やその他サービスを活用し、推進することが効果的であると考えています。あまり知られていませんが、博物館などでは、環境教育や普及啓発だけでなく、教員に対する自然体験学習のサポートも行っており、「自然を見る目」を子どもたちだけでなく、教員も養うことができます。子どもたちや教員だけでなく、一般の方でも、博物館ボランティアや学芸員等から、自然の見方を学ぶことができます。他にも各博物館で様々な取組やサービスを実施しています。しかし、それらの多くは知られておらず、十分に利用されていない現状があります。そのため、博物館等の更なる活用を推進することが「感性を養う」上で重要であると考えています。

具体的な戦略 その1

－五感で感じられる自然環境－

環境を
創る

- ・都市公園
- ・学校内ビオトープ

感性を
養う

- ・動物園や水族館の活用促進

社会全体の自然環境への関心

次に社会全体へのアプローチとして、「同時解決可能な分野との連携」や、「当事者をつながる活動の促進」があげられます。

社会に対して普及を行うには、普及する側の主張を押し通すのではなく、普及される側の立場に立つこと、普及される側にとってのメリットを提示することが必要です。

生物多様性保全分野で活動している人々にとっては、生物多様性の意義についてあまり知らない人々の立場に合わせることはどうしても難しく、また限度があります。そこで、他の社会課題と両立して解決できるプログラムが求められてくるのです。

より多くの方々に生物多様性の損失を自分事としてとらえてもらうために、社会的に注目されていて、誰もが当事者として意識できる分野と連携する必要があります。具体的には、気候変動や防災、教育などの分野が特に効果的であると考えています。ただ、世代ごとに響く分野は変わってきます。例えば、若者や保護者には教育、地域に密着して働く人々には防災、など、普及対象となる世代や立場に応じて連携する分野を変えるべきだと考えます。

また、「当事者をつながる」ことも必要であると考えています。生態系は地域によって大きく異なるため、現場に赴かないで行う普及啓発活動は、効果こそあれど限界もあります。そのため、実際の活動に触れることが理解のための大きな一歩となりえるでしょう。生物多様性の影響をダイレクトに受けやすい農家の方や離島で暮らしている方などにつながり、現場の声を聞くことで、生物多様性の損失という問題を自分事化すること、生物多様性の重要性を理解することができるようになると考えられます。

このことから、自然と生活が直結しているような当事者との交流活動を促進していくべきであると考えています。

具体的な戦略 その2

－社会全体の自然環境への関心－

分野を 超える

- ・同時解決可能な分野との連携
- ・特に防災・教育・気候変動

当事者と 繋がる

- ・自然環境と生活が密着している
人とつながる活動を促進



課題② 「生物多様性」という単語の複雑さ

同じく、若者や生物と関わりのない一般の方々に、生物多様性やそれに係る様々な課題を広く認知してもらうことが求められます。しかし、近年の生物多様性の認知度は依然低水準を維持しており、様々なアンケート調査が行われているものの大きく上昇しているといった結果は出ていません。具体的には、平成24年の内閣府の調査で生物多様性という言葉を知っているという割合が19.4%、同じく内閣府の令和元年の調査では20.1%と、ほぼ並行していることがわかります。

私たちが大学生活や団体での活動を行っていく中で、「生物多様性」という言葉がその普及を妨げている大きな一因であるという可能性を見出しました。「生物多様性」は言葉として、多くの難解さを内包しているからです。これは今年の流行語と比較することでわかりやすく理解できます。

今年の流行語

リアル二刀流 ショータイム	うっせえわ	親ガチャ	ゴン攻め ビッタビタ
ジェンダー 平等	人流	スギム ライジング	Z世代
	ぼったくり 男爵	黙食	



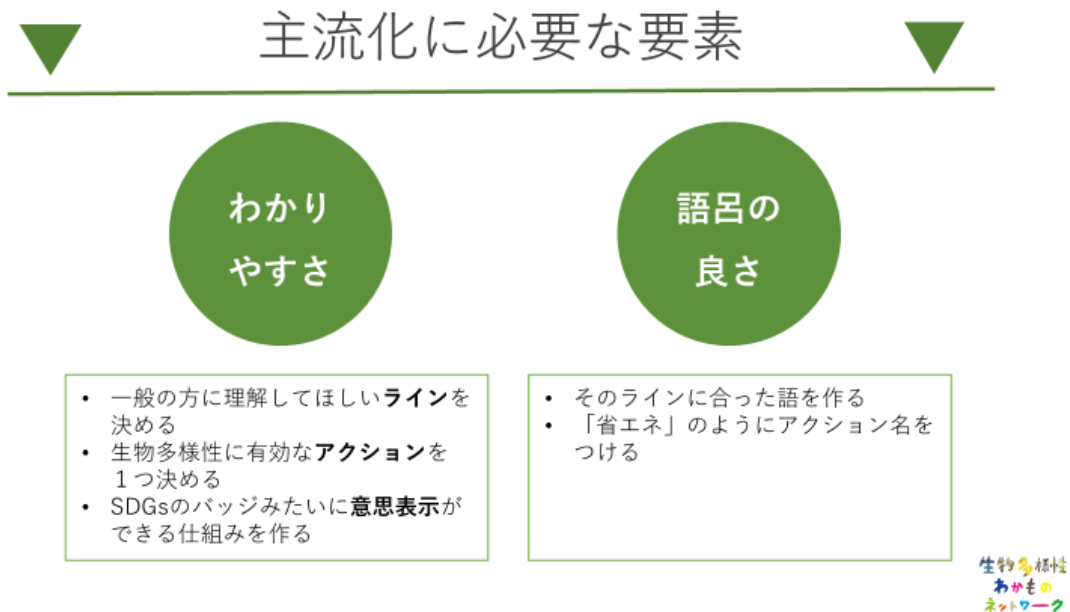
ユーキャン、第38回2021年受賞語、「現代用語の基礎知識」選新語・流行語大賞、<https://www.jiyu.co.jp/singo/>、(2021/12/10参照)

まず、生物多様性という単語の多義的な側面です。今年の流行語は一語に対して一つの意味というように、一対一対応なので意味が理解しやすい言葉です。一方で生物多様性は「生態系の多様性」「種多様性」「遺伝的多様性」の3つを内包する単語であり、単語の意味を聞かれると一口に説明するのは容易ではありません。よって、この生物多様性という単語の持つ多義性がそれ自体を難解にし、一般への浸透の大きな障壁となっているのです。

次に見た目の難解さです。生物多様性はみでの通り、漢字5文字からなる熟語です。ひらがなにしてもその文字数は9文字と字数で見てもかなり長い部類に入ります。それだけでも十分難解ではあるのですが、実際に生態学などの学問分野でも多用されるほどかなりフォーマルな言葉でもあります。人々が言葉を使う際に難しそうな言葉というのはそれだけでハードルが高く、理解しよう・使おうという気になりにくいものです。その傾向は、顕著に流行語に表面化しているのがわかります。これまでその点が盲点になってしまっていたのは、生物多様性が「生物の多様性」をそのまま言い表しているために平易な言葉であると専門家や環境・生物多様性の保全に関わる方々に認知されていたからであると考えています。知識のある人にとっては、飲み込みやすい言葉でも、言葉としてはかなり一般には浸透しにくい単語であると言えるのではないのでしょうか。よって、熟語という形態を廃し、文字数もより少なく言いやすいものにする必要があるでしょう。

最後に、語呂の悪さです。これは文字数とも関係しますが、単に文字数を少なくすれば良いというわけではなく、発音のしやすさや略称があるか、音が気持ち良いかも言葉が一般に浸透する際には重要な要素であると言えます。よって、この点についても、生物多様性という言葉を見つめ直す際の重要なポイントになると考えます。

課題に対する対処法②



私たちは、主流化を達成するために、必要な要素は2点あると考えています。

1つ目は「わかりやすさ」です。

これまでは「生物多様性」という言葉を主流化しようとしてきました。しかし、生物多様性という言葉そのものを理解してもらうことは、一般の方にとってハードルが高く、難しいです。そこで、私たちは、**生物多様性が大切であり、考慮しなければならない要素である**ということ、一般の方に普及することがより分かりやすく、最善であると考えます。一般の方に知ってほしいラインを明確にし、わかりやすくすることで、より多くの方々が理解し、行動することが重要であると考えます。

様々な分野、人による行動を伴う主流化は、多くの人が生物多様性そのものについて理解することよりも大切であると思います。そして、一般の方が生物多様性は大切であると理解したことを示す簡単なアクションを作ることを提案します。今まで一般の方が行いやすいキャンペーンなどは各地で行われてきました。これらのキャンペーンは少しずつ、私たちの行動に影響を与えたと思います。しかし、アクションの意味や意思表示方法の難解さが、主流化を妨げたのではないのでしょうか。このことから、SDGsのバッジのようにアクションをより分かりやすくし、誰でも気軽に意思表示ができる仕組みを作るべきだと思います。

2つ目は「語呂の良さ」です。

上述したようなアクションを拡散しやすくするために、「語呂の良いネーミング」をすることが必要であると考えています。意思表示だけでなく、アクションに関心を持った方が、広報する側になってもらうためには、流行語並みの普及効果を持つ言葉が必要です。流行語は、わかりやすさに加えて、語呂の良さを兼ね備えています。そのため、わかりやすいアクションと、それに対して語呂のいいネーミングをすることが効果的であると考えます。

これら2つの点から、生物多様性国家戦略では、下記のことが達成されるように求めます。

- ・「生物多様性が大切であるということ、自分が生物多様性のために行動した」ということを示す基準やアクションが作られ、多くの人に拡散される(理解しやすい、意思表示の仕方がわかりやすい)
- ・単語やアクションそのものを使用し、発信することの魅力を向上させる語呂が良い言葉が広く普及される。

更に、「分野を超えた連携」や「感性を養うこと」など、これまでに述べた内容を踏まえ、次期国家戦略の策定していただきたいと思っております。